

ノア・ストリッカーNoah Strycker 著<鳥の不思議な生活>オウムとヒトの音楽への異常な愛情

◎パテル博士が初めて、オウム的一种：キバタン、白い大型のオウムが踊る画像を IT で見て衝撃を受けた。オレもこれを聞き、早速 YouTube を訪れた。白い大型のオウムが音楽に合わせて体を揺らしている。その乗りがいい、頭を左右に、腹やら胸の筋肉をゆすり、確かに愉快地にノリノリに踊っている、音楽のリズムとあっている。

◎「音楽とは・・・」なんていうような、堅ぐるしい馬鹿げた話はさておき、世のなかを見渡してみれば、オレ自身のまわりの世界には、音が満ちあふれている。言葉や騒音も満ちあふれているが、それ以外は全部音楽のような気がする。構えて、いざ聞くぞというような演奏から、ラジオから流れてくる半分は流して聞いている音楽、動画、宣伝、お知らせなどの添えられモノのように流れている音楽、そうだ、四六時中音楽が流れている。とはいえ、今も河原に出て1時間以上、自然の音、エンジン音、動物の声、これ以外はやってこない。オレが山に入っているときも同じ状態、こういう状態は特殊な状態じゃないかなと思ってしまったが・・・。

◎音楽に関するヒト生物学、神経生物学。またまた知らない単語が出てきた、脳の研究のようだ。前回、空間記憶という言葉にも脳が関係していた、当然のことだと思うが、音楽も脳に関係しているはず。

◎いろいろな実験観察が行われた。動物が、踊る、歌う、音楽に感じ入って身をまかせるのは、とある学者の実験では、オウムゾウしかいなかったらしい。類人猿に関しては情報があがらなかった。

◎仮説：音声を模倣する鳥は、大脳基底核が変容しており、人の音楽に関係する脳の部分と対応している。

◎音楽ということで学説が二つに分かれている。音楽は生物学的に役立たずだ。ヒトの脳の副産物に過ぎない。

◎ダーウィンは、音楽を楽しむことも、音楽を作り出す能力も、人間の通常の生活に関して、直接役に立っていないという。一方で彼は、音楽は最も未開な人種をはじめすべての人種に備わっていると述べている。

◎ピンカー：音楽をはじめとして芸術一般の進化は、単に言語やその他、脳の複雑な機能の副産物だ。必要以上の脂肪や油のように、「脳の快樂の回路」を刺激するために設計されたものだ。

◎対抗陣営は、音楽は副産物としてではなく、自然選択の適応的意義として進化したのだろう。

◎母親が赤ん坊にあまくささやくコミュニケーション、声を状況によって変えていく、これが音楽。

◎動物の多くは、つがいになれそうな相手の前で、歌い踊る。

◎心理学者のスティーブ・ブラウンは音楽原語仮説を唱えている。人類の進化史のある時点で、言語と音楽は同一物だったと考えるものだ。脳の中で、言語と音楽は似たようなやり方で処理しており、また共通点が多く、はっきりした区別がない。高さ、音調、分節、旋律、拍の要素を含む。いずれも事実を伝え、感情を運ぶ。

◎初期人類は仲間に意味を伝えようとして、風、水、周囲の世界の音を模倣しはじめ、模倣が原語の形成につながり、複雑に、抽象的になっていった。

◎いろいろ教えられ考えさせられる。縄文人はどんな言葉をまず使い始めたのかな。ひゅうひゅう、ざあざあ、かなしい、うれしい、おかあ、おとお、たろう、はなこ、こわい、ほしい・・・ひゅうひゅう、ほしいほしいがリズムに乗って歌になっていったのかな。縄文土偶は横でこんな情景を見ていたのではないのかな。

<万博にて> 数えてみよう アジサイの花 まてまて これは多すぎる 色はね 色をみってみると
みんな パステルカラー パステルカラー って？ 絵の具でいうとやね 青や赤や黄に 白色をたっぷりま
ぜる これは反対だあ 白色絵の具に ちびっとの青 青っぽい白色 ちびっとの赤 赤っぽい白色
ちびっとの黄 黄っぽい白色 こんなことかな パステルカラーの大きなだんごが 緑のはっぱの中に
たくさんたくさん 散らばっている 雨が降ってきた あずま屋であまやどり ねえねえ 今日は降らない
いってなかったっけ 朝は降っていたけれど だんだん晴れだして 洗濯物を外にほした
このままいい天気 洗濯物も乾くかなと思っていたのに アジサイを見にきた 傘も持たずに
アジサイには 雨はにあうね じゃがじゃが 洗濯物は どうしてくれる くそたれめ

054 ぼやき-1 100720

オレ 今 走ってる 土手のそば 土手のそばといっても 土手の外側
ちやうどうまく見つけた 道
ここなら車も来ない 人もほとんど来ない
車はガードレールの 向こうっかわを 走ってる

人は会うか会わないか 自転車も会うか会わないか
ここからしばらく行くと土手に登る坂がある
坂を登ると土手の上だけれど 毎日の雨で 土手の中がわは 水浸し 泥だらけ 泥の中を走ると
上手いこと すってんころり 上手いことというけれども ずるり ひえい ひゃ おととと
こんなことは しょちゆうあって そういえば長らく すってん ころりはないね

山に登ったときは
一日に一回以上は すってんころり よくころぶねえ
転んだところで怪我はしない だいじょうぶ
転ぶほうがいいんだよ 尻もちをついたほうが けがをしないんだよ

そうそう ここんところ 毎日毎日 靴がびちゃびちゃ
昨日もずっくり濡れて そのまま 斜めにしておいた
今日 新しい靴下をはき あれれ ちょっと 間違い 新しい ではなく 洗って干して
このことをなんていうのだね なんか言葉があったような気がするが 洗いざらしだ
この 洗いざらし 更じゃなくて 晒す
ま いいか 洗いたての靴下だ だそうで 洗いすぎて 色が抜ける ということかな
ま いいか
あらいざらしの 乾いた靴下をはいて 昨日の濡れた靴を履いて 濡れたといっても一日たてば
高い気温 半分乾いているね

ところで今年の梅雨はよく降るね 毎日降っている やだねえ ざあざあぶり
今日も朝 絵を描いているあいだじゅう ざあざあ しゃばしゃば だった
昼飯を食っているころに なんだか晴れているよう 歩いている人が 傘をさしてない
道路が乾いている 今なら 川に行けるかな
最近の 予報士は 十年に一度 百年に一度 なんて 大げさな表現
温暖化現象はよくないが 急に何もかも 来るねえ 来たねえ

服を着替え 水筒をもって 今日は ICレコーダーをもって そう これを録らなければ
雨具の上を着こんで あれれ 窓ガラスに雨の粒 ええい決行 ふらり自転車に乗って 河原を目指す
自転車を走らせながら 乾いた靴下が 少しずつ湿りだし 湿った靴下が 足に感じられる

オウムが 音楽に合わせて 体をくねらせる 動画を見た
音楽とは 芸術とは そんな話は置いといて
なんていうけれど 置いとけないのでちょっと
コロナ禍にしる 温暖化現象の 異常気象にしる やっぱ 気にしなくては 音楽とは 芸術とは

おうむの話から 日本に大昔にいた 縄文人 最初に なんて言葉を はいたと 君は思う かな
さてさて なんといったかな どんな言葉が 一番 欲しかったかな

来いこい 行こいこ かな ほしい はらがへった これはちょっとむつかしい じゃ やはり
来いこい 行こいこ これを二回三回くりかえして 棒で樹の幹でも叩いてみたら
来いこい 行こいこ かんかん こんこん 来いこい 行こいこ どんどん でんでん
言葉ができた 音楽ができた 身体が揺れる これだせ

先祖が作った 言葉は 音楽は日本語だけなのか
あ～あ～ ようよう ふたつ 言葉が並ぶのは どうなのかねえ
でも 二つ並んだら なんだか 身体が揺れる 気持ちが踊る オレ よく 二つ 並べるねえ

河川敷の遊歩道 いつも おれが 走っているところは 水が溜まって 地面が濡れて
泥がかぶったところ あそこには 今日はいけないねえ
あそこを走ったら 靴も服も泥はねだらけ いやだねえ

だから今日はこのまま土手の上を走る 土手の上が車道になっているところまで
そこまで行ったら引き返し
また引き返し その部分を 二往復すりゃ 全部で 一時間ぐらいになるねえ
そこそこ走れるねえ
そこそこはしりゃ 気持ちがいい ってもんだ

そうだ 聞いてよね 半月ぐらい前に このあたりで 上を見上げたら
羽を揺らして止まっている鳥 ホバリング まさかまさか チョウゲンボウ に出会った
それから 毎日 このあたりに来ると 空を見上げ 気にしているが
そういえば 二日に 一回ぐらいの割合で
見かける チョウゲンボウは トンビと同じ色 大きさはハトぐらい
遠くを 飛んでると ハトやら カラスやら 近くで見ると 茶色 なんだか ちょっと 細身
猛禽とは いえ さほど 恐ろしくは 見えない
このあたりで ぐるぐる してる ということは 狩りをしてる のかな 巣がまじかに あるのかな
ただ 思う 探鳥は オレには似合わない 長く待てない じっくり観察できない
ええい めんどくさい 動かないなら いっちゃんぞ オレが動くぞ 帰るぞ
お前が動くのを 待っていたら 日が暮れる いらいらするう これじゃ だめだねえ

あ あそこに止まった 土手の横に背の高い倉庫の屋根
次の時は フードの上 次は時は 突き出た棒の上
きゃつは あそこに止まるのか あそこが待機場所か きゃつは あそこあたりで 休憩して
まわりを きよろきよろ うかがって 獲物はいないか 敵はいないか 友達はいないか
次の日 お いるいる 屋根の上 たちどまって見ると
あれれ もう一匹 さらに一匹 あの動きは カラスだね まぎらわしいね
なんだ まぎらわしい そらあいかん ハトや カラスに失礼だ ごめんちゃい

056 ぼやき—3 120720

今日は風がある 台風とまでは 行かないが 吹いている 迎え風 おっととおしかえされる
こら おおげさな 河原の草が揺れている 風に吹かれて ざわざわ さわさわ
河原に生えているのは ススキ 葦 どう呼べばいいの
刀のような すらりとした はっぱ うまい具合な 曲線を描いて たれさがる
葦原 葦のはらっぱ 昔の日本人は この風景が好きなんだね 大事にしてるんだね

葦のはらっぱ かげが吹いて ざわざわ さわさわ
あの動き あのうねり あの音 あの空気
これも 数学で 式を作れば 簡単な話 たちまち くさっぱらが できそう
そこに風が吹く またまた 風の速さと 強さと 方向と 時間を入れれば
あの さわさわ ざわざわが できるんじゃない

あの風景が 計算 できても やはり ほんまものの さわさわ ざわざわが いいよねえ
計算というけれど 条件をいっぱい探し当てて そいつらを ひとつひとつ 調べていって
いくつかの式を作って その式と式を組み合わせでいって いって いって
ええいどこにでもいけえ

そらあ 絶対 ほんま物の自然がいいよね こんなちっぽけな河原でも
汚れて ひっかきまわされて 人の姿が 人の影が いっぱいあっても
くさはくさ きはき つちはつち そらあ 最高だ

今 思いついたが 不思議なこと あれれと 思うこと
山の中やら 公園の中やら 自然の中に いて
葉っぱが 一枚だけ 揺れている 枝が 一本だけ 揺れている
あれれ なにか いるのかねえ でも いないんだよね
あそこだけが 風の通り道 あそこだけが 風が吹く ふしぎだねえ

風っていいよな いつも吹いてほしいねえ きつすぎるのはいやだよ 無いのもいやだね 大風反対だよ
かってなことを言って申し訳ないが 快いそよ風 爽やか涼しい風
コマーシャルの コピー文句 じゃあるまいし
大風も 突風も 蒸し暑い風も 北風ぴーぷーも 吹くぞ

今日の雲 見上げたら空 ぜんぶ雲だ もっこもこの もっこもこ 青い色がほんのちよっと 白い色も
白い色も すくないねえ グレーの雲 もっとグレーの雲 グレーグレーの雲 ややや またまたポツリ
降ってきやがったぜ もうちよっとで 終わるのに 本格的に降ってきた やだねえ 一時間もたないね
雲のこと そうだねえ いまままで 空が きれいだと つぶやいたことが 何度もある 頭のなか
雲の画像が回転 全部オレが 見た雲だよ 絵のようやねえ 天国だね なんて 空々しいわごと
一つが 消えずに残った 画像 夕日はきれいねえ それこそ薄い青 薄い黄 薄い赤 今度は 絵の具に
それぞれの絵具に 白を混ぜて いくのではなく キャンバスの白を 利用して 絵の具を うっすく
刷く 筆を刷く 布で拭う そんな微かな 透明なグレー すこしずつ 沈んでいく おやすみ

中学教師だった頃の卒業式
寒い体育館で来賓の長いスピーチを
三十回以上聴いたことになる
生徒たちのどの暴れん坊もよく堪えていたものだ
その時代には当たり前のことだったが

昭和三十年代 まだ戦後が終わらないころ
生徒たちは貧しい私服で
私たち教師はスーツは一張羅
半数の子が就職組だった
その子たちは
その日で学校生活が終わるのだ

ほとんど世話を焼かせなかった子
毎日心配の絶えなかった子
うちの手伝いで休みがちだった子
心の中は 十五歳なりに
それぞれ違う思いを抱いていたはずだが
なぜか卒業式には
同じように神妙で
ちょっと寂しそうで それでいて不意に
昂然と顔を上げる
今日までの自分とも
別れる日なのだというように

詩はまだ15行続くが、全部を載せると、オレの出番が無くなるので、続きは割愛して省略します。

<私自身も たくさんの人 いやな自分とも別れてきた 最後まで続けられなかった教師・・・>

この元先生の詩を読んで、オレの十代、そのころの世相を思い出した。この詩は、言いまわしが稚拙で、説明が過ぎて、好きではないが、この方の人生の重さ、想い、感情、そんなこんなが感じられ、思わず読み進み、ここにも登場した。まず稚拙なんてことを申し上げ、失礼ですが、抽象的な表現、説明をできるだけ削いだ画を心掛けているものとして、出てしまった言葉です。言葉をもっと研ぎ澄ませ単的に一語一語を、なんていうとこの情景が別の空間に飛んで行ってしまふかもしれない。この詩は、丁寧に説明されている、情景、子どもたちの表情、自分の気持ち、時代の背景、これらの説明があつてこそ、オレも、「ああ あの時代」「当時は そうだった」というように景色が浮かび、当時を振り返って、ここにぼやきを乗せられるのだ。

オレの十代のころ、小学校・中学校時代の先生の思い出はたくさんあるが、これは次回にまわすとして、この詩の作者の先生、オレが小学校・中学校時代にお会いした二十歳代の先生方と同年代だとまずは感激。いちばん澆瀨と教職を励んでおられた年ごろかと思われる。戦後十年、日本はまだまだ発展途上国だった、まだまだ人々は飢え、がまんがまんの時代だった。冷暖房も、乗り物も、食べ物も少なかった、そんなことが思い出される。

今日のぼやきは、河原を走りながら、三つのことを言っているのので聞いてくださいませ。

ひざサポーターの話。叙勲の話。GPSの話。

新しいひざ用サポーターを付けている。もう何年前なのか、何年経ってしまったのか忘れたが、福井県の、「経ヶ岳」に登る前日にちょっと散歩のつもりで、「取立山」を歩いていた時、ひざを少しねじったのが始まりで、二年間はひざいたで苦しんだ。ひざは五十歳ぐらいから何度もやっている。「いてて」と歩けない、階段の上り下りもできないというような状態だが、隣の、「かん整形外科」でひざに注射を打ってもらうと、二三日でけろりと治った。福井の時は、もちろんいつもと同じように、けろりと治ると期待したが、完治まで二年かかってしまった。

とはいえ、山は、二三个月あとから登りだした。今から考えれば、上り下りに、「いてて」の連続だったが、それでもちよくちよく登っていた。そんなことがあって以来、普段からスパッツ・レグウォーマーは欠かさず付けている。オレのひざは、「冷え」が大敵のようで、冷やさなければなんとか頑健なひざが保てるようだ。

河原を走る時はひざサポーターを付けている。今まで薬局で買った安価なものばかり使っていた。今回の新品は山用サポーターとして出ているものを、ネットで1500円也のものを買った。走る前に着替え30分ほど椅子に掛けてパソコンを触っていたが、このサポーターは分厚く締めりもきつい、ひざによさそう、山にもよさそうだと思うのだが、普段につけるにはちょっときつい、ひざあたりが圧迫されジンジンする感じ。注文時に笑ってしまったのが、2個1500円となっている。この2個という表現は、左右ひとつづつの2個であって、二組ということではなかった。昔、親たちが、「ジャンジャン横丁で靴を買おうとした人が靴に値段が書いてある 左右が要るなら倍だと言われた」というような笑い話がある」と聞いたのを思い出してしまった。ま、サポーターは、片方が必要な人もいるもんね、と笑いながらも納得。

勲章の話：パソコンを触っていたといったが、その用事というのは、友人たちにメールを書いていた。友人のひとりが勲章を授与された、これはめでたいことだ、ホームページに飾ろうという話になり連絡を入れると、過去にも三人の仲間が受賞しているという。それはいかん、片手落ちはいかん、受賞歴のある方々に連絡を入れると、断りの返事が来た。一人は、「皆さんが載るなら」一人は、「もう 以前の話なので」そしてもう一人の方の返事が面白い、勲章とはどういう性質のもので、だれがもらうのか、叙勲の条件は、そんな四方山話が書かれている。この方がこんな能弁で、長い文章も上手く、読むものを飽きさせない、感心しながら読み、その返事を書いていた。四方山話の一部を紹介します。

勲章を簡単に説明すると、「国のために貢献したものを顕彰する制度」で、その対象は主として官吏と軍人でした。その実態は、給料は安い名誉をあげるから辛抱しなさい、というようなことでした。戦後、昭和39年に生存者叙勲が復活した際に、民間人も広く対象となりましたが、現在までの受賞者を見ても圧倒的に公務員がおおい。一般職の公務員の授章資格は概ね次の通りです。一定年数勤務し、かつ一定の役職、本省では課長補佐、地方では部次長を歴任し、問題のなかった者です。叙勲授章が名誉なことと考える見方が主流ですが、受賞者は元公務員がほとんどです。公務員以外の方々からはどうみられているのでしょうかね。

我が家にも勲章が二つあって、子どものころオヤジの机を覗いて見ていた。それはオヤジが二十歳過ぎから4年間の兵隊生活でもらったものだと思っていた。オヤジは学校を出て、鐘紡の社員となり、しばらくして出征したと聞く。友人の四方山話の中に、現在は70歳以上の方が対象だそうだが、昭和の戦争時代は二十歳過ぎの若者にも渡っていたようだ。勲章は、えらい軍人が、大将や少将が軍服の胸にいくつも飾っている映像はよく見かけるが、軍人のことはよくわからない。

文化勲章や文化功労賞は、アーティストや学校の先生がもらっている、これはTVなどのニュースで流れる。「おお あの有名な方が 綬章者なのか」と顔の知っている方々がよく出てくる。官吏の方、この方々はほとんど名も知らない。元国会議員なんて人の名も聞くねえ。

オレ自身、ほんとうを言うと、「勲章 そんなもの オレには 関係ねえ」というのが本音。もっとも、向こうも、「お前になんか やれるもんじゃねえ」とうそぶいてもおられないかも。友人から、菊の紋章が入った封筒が送られてきた、綬章の報告封筒だ。結婚式の招待状のような封筒だけれど、なにせ、菊の御紋章、これはすごい。厳かに受賞の喜びを述べておられた。叙勲は国家からいただくものらしいが、菊の御紋章が関係してくると、さらに一段、名誉も歓喜もあがるのだろうか。

GPSの話：50歳のころに北海道方面に、「ふらふらペインティングの旅」に出かけた。パソコン・カメラを持って、これらをつないでタイムリーに旅日記でも公開できれば素晴らしいともくろんだが、まったく技術不足で手も足も出なかった。ところが、いまや世のなか、「いまここにいるよ～ 素晴らしい景色だよ～」 「いまこれを喰ってる この有名なこれを 喰うことができたよ～ 旨いよ～」なんていうような情報が画像や動画付きでスマホやパソコンにリアルタイムで飛び込んでくる。オレがやりたかったこと、手も足も出なかったことがいとも簡単に皆さんがやっておられる。ただ、オレがやりたかったことは、こんなつまらないことだったのかと世間を見渡してがっかりしている。「なに がっかりだって こんなきれいな景色を 見せてやって いるのに」「おまえも これを喰ってみろ グルメとは こういうことを 言うんだぜ」にぎにぎしくライブ情報を見せてくれている。こんな情報がいいと思っているのかね、こんなつまらないことで時間をつぶして、平和ボケだね。皆さんが公開しておられるいろいろな情報は美しくない、文章にしろ画像にしろ、美しくないものは面白くもなんともない。えらそうにいうが、オレは、今は、文章と画像を創ってから、載せている。

もっとも、ニュースはその限りではない。御岳山が大爆発の時には、逃げまどいながらもスマホで画像を取りつつ、その画像を友人たちに送りつつ、本人も必死に走って逃げていた、複数人からのそういう画像がTV画面に流れていた、そういう画像、TV画面にくぎ付けになって眺めた。NYのビル崩壊の様子、津波が押し寄せなん人もが、何軒もの家が流されている様子、ニュースに限っては、リアルタイムは大事だ、少々汚くても、拙くても、タイムリーなライブ情報は素晴らしい。

「オレ 最近気づいたことがある 地図が読めない男だったことが 人の話は聞けるタイプだとは思っているが まさか 地図がわからないヒトだったとは 車の運転中 方角がまったくわからなくなる 山を歩きながら なにがなにやら これもよくある 山の地図用のスマホが必要だと痛感 スマホのGPS機能が欲しい」なんてぼやいていた。山田さんが、「通信のできない スマホでいいから 手に入れたら 山の地図が 使えるよ」これには驚いた。こんなことをぼやいていると、通信のできない昔のスマホを橋本船長がくれた。「以前の機種があまっているので 動作確認して進呈する」というありがたいお申し出にさっそくとびついた。スマホのGPS機能がこれほど役に立つとは、何度か山を同道した人たちから見せつけられていた。

もうすぐ、7月20日が近づいている、7月20日とは、子どものころから梅雨が明けるとは聞かされていた、オレも知ったかぶりな顔をして、どなたにもそう言ってきた。なのに天気予報ではまだまだ雲マークが続き、お陽さまマークはちょろっとしか出てこない。今日も朝起きた時点で、暗いなと思ったら、窓を開けると降っている。今日は降らないのじゃなかったかと思いながら朝飯を食っていた。昼前から雨がやみ、河原に出てきている。ちらっと青空も見えたりしたがだんだん暗くなってきた。それでも河川敷の舗装されたところからは乾いている、風も爽やかだ。毎日土砂降りがつつけば、ちょっとの青空が覗けば、「からり爽やか」なんて喜んでいる。どうも今年の梅雨開けはもう少し先のような。

そのカメラマンはモノクロフィルム、を渡され、「このテーマは モノクロフィルムで 撮れ」と言われたそう
だ。その本を買った、いま届いた、すごくいい、感動した勢いが感じられるメールが来た。残念ながら、オレは
その本を見ていないので、前後の話が見えてこない。一つのテーマ、ひとりの人を、長い年月をかけて追いか
けた写真集らしい。その写真集は各界から称賛され、にぎにぎしく語られているらしい。

「モノクロの世界は どうですか」と言われ、頭の中にたくさんの画像がよぎった。若い頃の勉強で、木炭や
えんぴつでデッサンを描いていたねえ、美術学校の入学試験準備にやっていたねえ。美術学校なんてどうでもい
いやと思いだしてから、えんぴつは手放せない。今でも紙さえあれば、アトリエのあちらこちらに転がってい
るえんぴつでらくがきを描いている、これはなかなか面白いですぞ。

「モノクロの世界は どうですか」とっさに答えられず、ネットでヨーロッパの有名画家の銅版画を探し出し
て、画像を送った。オレの好きな画家はルオーですと言って。あらためてルオーの画像を見ると、「あれれ こん
なに 重苦しい題材だったのか」といささかの外れな、今のオレとの乖離にちょっとがっかり。それでも画集を
出してしばらく見ていると、油絵の具の筆さばきやら色の輝き具合が頭の中で沸いてきた。次にゴヤ、これもネ
ットの小さい画面で見ると薄暗い絵にはいささか興が薄れていった。次にレンブラント、この人は紙の上に金貨を
乗せて、絵と金貨を交換したというぐらいに売れっ子の画家だったようだが、ネットの絵はこれまた、いささか
興が薄れる。なんでこんな結果になったのかと反省しながらも、モニターに映し出される画像では、絵の良さが
なかなか出ないことを発見。これらの画家は、油絵がいいんだよ、ほんま物の油絵を見て、それからほんま物の
銅版画を見て、彼らの絵を感じてください。

「モノクロだ タブローだ らくがきだ」とやかく言ったところで、絵はほんまもんを見ないとわからないよ、
画集ではわからないよ、まして小さい印刷物ではもうひとつわからないよ、ましてのまして、モニターでは、ま
ったくわからないよ、これが結論だね。今の、ネット少年たちには、この話は通じないかも。

モノクロモノクロとつぶやきながら、河川敷、ベンチのある所で地面に尻を突いてストレッチ体操をしながら
眺めていた。地面は小粒の石コロをコンクリートに埋め込んだブロックが貼ってある。先日来の増水で地面は砂
が相当流れ込んで、ズボンをはたかないと汚れたままだ。その小石を見つめていると白い石、黒い石がたくさん
混じっているが、まっ白、まっ黒というとなかなか難しい、というより、まっ白、まっ黒、というものを確定で
きない、「まだまだ これは まっ白 まっ黒 ではない のでは」

小石の中に貝殻が混じっている、小石たちは海から来ているのだと思われるが、そんなことはさておいて、貝
殻の白が一番白っぽい。残念ながら黒い石はない。

黒は、炭、石炭、いくつか思い出せるが、ほんま物の黒とはなんだろうと首を傾げる。色の仕事をしているオ
レがだよ、感覚的な思い込みがいかに頼りないものかと実感。オレが絵を描くとき、黒い部分が欲しいなあと思
ったら、黒い絵の具を塗った上に、青とか緑とかの透明絵具を薄くかける、青とか緑とかが黒を一層黒く見せて
くれる。その横に白い色を入れると、白い部分との対比でいっそう黒さが際立つ。黒さ白さということでは、隣
の色との調和か対立か、画面の中の調子によって、色もさまざまに見えてくる。色が、黒色、白色ということは
科学者の言うことで、絵の話、絵の中の黒色や白色とはまったく別世界なんですぞ。

黒色は、炭やら煤やらから作る。50年前、奈良の商店街で煤をこね、書道用の墨を作っていた。

<一万年の進化爆発>本の中に、「ネアンデルタール人の血」という項がある。読みながら思ったことは、ヨーロッパ人にとって、ネアンデルタール人とはこういうものだったのかと不思議に思った。「ネアンデルタール人の血が流れているなんて 勘弁してくれよ」私たちホモサピエンスがいくつかのネアンデルタール人由来の遺伝子を持っているという考え方に、本能的に拒絶反応を示す人が多い。これはネアンデルタール人が劣っている、サルのようなからという一般的な印象のためであるらしい。ネアンデルタール人はほとんどがヨーロッパで生活していた。我々ホモサピエンスと近所に住み、接触する可能性がある時代が長く続いたらしい。日本人にとって、ネアンデルタール人は身近な存在じゃない、彼らの BODY 復元を見てもこれは普通のヨーロッパ人、こんな人はヨーロッパにはたくさんいるのではと思ってしまう。裸のおっさんは逞しく凛々しく、少女は可愛らしい、大人になれば美人になるねえと思わせる。

我々、ホモサピエンスはウイルスから遺伝子をもっているかもしれないというのだ。ウイルス自体は誰かのどこかの細胞に忍び込んでその細胞をのっとり、自分たちのコピーをつくる。のっりの過程で宿主を殺すか、宿主のゲノムに組み込まれ共生して仲良く暮らしていくかだ。ヒトとサルは3千万年前に拾った同じウイルスに由来するたんぱく質を持っている、身体の中で重要な役割をしているらしい。私たちはウイルスの子孫であることを覚えておくべきだ、ウイルスは、哺乳類が生まれるもっとも前から以前から地球にいた大先輩なのだ。

遺伝子移入ということでは、よく知られているのは、家畜と栽培植物に関するものが顕著だ。牛、ミツバチ、犬・小麦、ジャガイモ大豆・。

ネアンデルタール人とホモサピエンスは暮らしぶりに大きな差があった。ネアンデルタール人は、オオカミの群れのようにリスクの高い暮らし方をする非常に協力的なハンター集団だったが、ホモサピエンスは雑食性で現代の狩猟採集民に似ていた。脳はともに大きかった。

おもしろい進化論。中東やアフリカでラクダを完全に使える技術を身につけたヒトは、ラクダは陸上輸送にとびぬけて優れた手段となった。ラクダがないヨーロッパは、車輪付きの乗り物を使うしかなかった。車両は明らかに高かった。高かったおかげで、鉄の技術、道路建設の技術などからヨーロッパ文明が起こっていった。日本人のオレは考えた、日本ではと。狭い日本では歩けば事足りた、半日も歩けばいくつかの町や村が通過できる。日本のまわりは海だらけ、オレの住まいする京・大阪には淀川がある。物流は船で行われていた模様だ。

10 万年前の世界人口は 50 万人ぐらいと推定される。1,2 万年前に氷河期が終わり、人口は 600 万人ぐらいと推定される。農業が始まり食物生産が大幅に増えたが、狩猟採集時代より栄養的質は低下した。初期の農耕民は、ヨーロッパでは小麦などの穀物が中心となり、アジアでは米などの穀物が中心となった。豆類など他の作物、家畜に由来する肉類も食べたが、狩猟採集時代より炭水化物が増えたたんぱく質が減少した。こうした食事への対応の遺伝学的詳細がわかり始めている。いくつかの遺伝学的変化が新しい食事の栄養不足を補うのを助けた。肉食動物・雑食動物・植物食動物、これらの動物には遺伝学的変化はなかったのはなぜなのかな。

農業は人間社会を作り替えた。そしてその結果生じた選択圧が様々な形で私たちを変えた。その変化の中には、栄養と感染症に関する新しい問題へのかなり明らかな順応にかかわると思われるものがある。心理や知能、科学の誕生、そうしたたくさんの進化的応答はさておき、感染症について。

感染症は狩猟採集民より農耕民にとってはるかに大きい脅威だった。農耕民は感染症に対して強い選択圧を経験したのだ。やがて石器時代の先祖よりも、感染症に対してはるかに有効的な遺伝的防御を進化させた。

前回、ヒトが狩猟採集から農耕民に変化してから、感染症の脅威にさらされたという話を読み、今のコロナ禍、十年以上も前に書かれた本だが、ウイルスのこと、感染症のことなどをもっと知りたくなった。

NHK のラジオ番組、「子ども科学電話相談室」を聞いていた。たまにこれを聞いているが、「え そうだったのか」と驚かされることがよくある。今も後半で、可視光線の話が出ていた。子どもが、「夕日はなんで青くないのですか」と聞いていた。昼に空を見ると青いが、夕日はオレンジ色や黄色になってくるのは・・可視光線というのがあって・・というような解説がありちんぷんかんぷん。えらそうに色のことはまかせてなんて言っているが、オレもシニア科学電話相談室に電話して相談しなくてはと苦笑。

「なんで 外来生物を・・」という舌足らずのボウズの質問があった。ラジオで先生の丁寧な解説を大阪弁で聞くと、なんだか気恥ずかしくなるが、オレも大阪弁だから仕方が無いのかな。「外来生物が新天地にやってくると 天敵と病原菌がい～ひん（いない） そやから（なので）はびこるんや」「日本にやってきた セイタカアワダチソウが がんぼってる 反対に アメリカに行った 葛が がんぼってる」

コロナ禍だ、感染症だ、この言葉は今年の寒い季節から TV 解説でいやというほど聞かされた。こんな言葉はオレには無縁、専門家にまかせておきましょうとあつけらかんとしていた。仕事柄ほとんど毎日籠りっきりでオタク人生のオレには、公共乗り物も、会議や宴会もほとんどない。絵の先生の講座も閉鎖中、山にはよく行くがオレのいく山には人はほとんどいない、コロナ禍なんてホットケイと過ごしている。ただネアンデルタール人の登場の本を読んで、ウイルスとは、感染症とは、ちょっと調べてみようと思った。

コロナ禍の今、ウイルスとはなんだと、先日来 TV など簡単な解説がある。たくさんの先生方が、意見をいうが、なにがなにやら、どれが本当やら、理解しがたい。ばい菌とは微生物の俗称である。「ウイルス」と「細菌」とはまったく違うものだそうだ。細菌は単細胞なので細胞分裂によって増殖する。大腸菌、ブドウ球菌、結核菌など。細菌は抗生物質が効く。ウイルスは細胞がなく、他の細胞の中に入り込んで、自身の複製をつくって増殖する。インフルエンザウイルス、ノロウイルスなど。ほとんどの抗ウイルス薬が無い。風邪はウイルス感染である、「おおそうか」知ってるようで知らなかった、そういえば風邪薬は無いものね。

感染症とは大気、水、土壌、動物などに存在する病原性微生物が、ヒトの体内に侵入する疾患。感染症を起こす微生物は、細菌、ウイルス、真菌（カビ、酵母）など。寄生虫も含まれる。病原体に感染しても発症しないキャリア:伝染性病原体の保菌者がたくさんいるが、感染力はあるということに注意が必要。

微生物はヒトの体内のもたくさんいる。外部と接するところにたくさん住みついている。皮膚、口腔、消化器、特に腸内には 500 種 100 兆個の細菌が住みついている。

ウイルスも数万種ぐらいあるらしい。ウイルスは自身単体では増殖できない。他の生物の細胞の中に入り込んで増殖する。哺乳類や鳥類の細胞の中にもウイルスは暮らしている。ウイルスが誰かの身体の中に寄生して持続し平和的に共存する分には、誰かにとっても、ウイルスにとってもお互いに利益を得ているが、そのウイルスが動物に移ると攻撃ウイルスに変化することがある。

旧約聖書:「汝ら、もしある国に疫病が存在すると知ったら、そこに行ってはならぬ。だがもし、疫病が汝らの今いる国に発生したなら、そこを離れてはならぬ。疫病で斃れるものは殉教者である」

◎朝、急遽行き先変更になった。滋賀・福井の県境にある、「三重ヶ嶽」の予定だったが、「雨が降る」ということで近場の、「剣尾山」に行くことになった。剣尾山は何度めか、今回は宿野（しゅくの）から入る。今は閉鎖されているが、大阪府の青少年野外活動センターがあり、建築家の葦原義信の建物群が残っているという。

◎車を止めた横に受付の建物がある。一部がガラスが割れ傷んでいるが、丁寧に積んだ石、面白く形づくられた小さな受付小屋、思わずにこりとしてしまった。歩いていくと、平屋の建物群、壁はコンクリートに窓が小さくこれまた面白く形づくられ、分厚い壁に穴が開いたようでまたまた思わずにこりとしてしまった。形づくられた建物の塊に、「こういう 練られた 程度のいい形は 気持ちがいい にこりだ」

◎剣尾山登山口に、「町石」があり解説が書いてある。ちょいいいしと呼ばれ麓の村から山頂の月峯寺まで続いています。寺までの道標で 38 個立っています。一町は 100M ぐらい、石は 1M ぐらい、梵字や距離や寄進者の名が彫られています。町もしくは丁の字が両方使われています。(町と丁 統一すればいいのにね)

◎登りだした、整備された道、地面が濡れている、昨夜は雨だったようだ、今も、いつ降ってきてもおかしくないという空模様。湿度が高い、それこそ湿度 100%といってもいいくらいかな、霧の中、雲の中を歩く感じだ、まわりの樹々が霞んで見える幽玄の世界だな。は～は～ひ～ひ～汗が出てくる、半そでのシャツが濡れてくる。

◎1 時間ぐらい登ってくると、月峯寺跡にやってきた。かつての寺院の敷地、石の囲いや礎石、地藏さんたち、梵字たち、「そらあ 奈良の寺に比べれば 小さい寺だけど」それでも小さいお堂が、祠がいくつか建っていた、老若のボンさんが幾人か暮らしていた、読経の笑い声、大声に小声、夜も昼も獣たちの徘徊の姿、見えてくるぞと想像するだけで楽しい。

◎月峯寺跡に建つ解説板:月峯寺は 17C には廃寺になったようだが、鎌倉時代に造られた石造物が残されており、かつての隆盛が窺われます。平安時代の土器も見つかっており、古くから人々の信仰を集めていたようです。本堂をはじめ、十数棟の建物を備えた一大伽藍が広がっていた様子が復元されています。

◎少し下ってくると笹の原、靴が隠れるぐらいの背丈に笹が一面に茂っている。山の上のポコリンに、なだらかな斜面のポコリンに笹が茂っている。いろはやや黄緑がかった緑、昨日の雨粒が葉の上に残っている。細い樹々がによきによき立っている、「これは これは赤松 あれれ ほとんどが赤松」この景色はなかなかのものである、びっしり覆われた緑の上によきによきの樹、葉の茂りが少なく空もよく見える。

◎今日はまもなく雨が降ってくるという予報で、簡単ショートコースを一巡りしてきた。野外アスレチックのロープがあちこちに、あそこを渡って次は飛び越えて、こんなコースはオレの一番苦手とする遊び、これはしたくないねえ。今日は営業していないが 3500 円の料金だという。

◎まもなくなんだかエンジン音がしてきた、チェーンソーで木を切っているような音、なんとドローンの練習場があった。相当上のほうを一機飛んでいた。ドローンには興味がある、あれを自由自在に飛ばせたらという夢がある。ま、この年なのでもう挑戦する気持ちはまったくないが、あれを飛ばしていろいろな映像を撮れたらさぞかし面白かりょう。先日もエベレスト付近の山を歩いている一行、NHK の取材班と山屋さん、ドローンを飛ばしてあっちゃこっちゃを撮影していたのを見たが、その画像の面白いことには感動した。ちょっと違った視覚、今までは思いもよらなかった場所から覗ける、いいねえ。